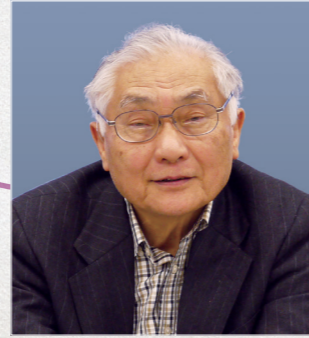


学びの起点となる 歴史教科書へ



「学ぶ会」代表 安井 俊夫

●教科書は「教師用」か

歴史教科書は、そのページで取り上げるテーマ（例えば沖縄戦）について、その内実を示す主な事実を重点的に説明する。教科書が分厚くなるのを避けるため、事実の理解に必要なことを簡潔に描くことになる。

だがこの「主な事実」とか、「必要なこと」は、教える側（教師）の、そのテーマに関する理解の仕方・考え方、つまり教師側の論理によって決められるのであって、それを学ぼうとする子ども側の「学びかた」を踏まえてはいない。

つまり教科書は、教師が何をどう教えるかを描いた「教師用図書」になっている。

本書『ともに学ぶ人間の歴史』は、これを教科書本来の姿である「子ども用図書」に大きく転換させようとしたものである。

●学びの起点＝問い・疑問

教科書が「子ども用図書」であれば、子ども側からの学びの起点になることが求められる。起点となるためには、子ども側から問いや疑問が生まれるかどうかが問われる。

沖縄戦は、アジア太平洋戦争の学習で重視す

べきテーマである。だが重視すべきと認識しているのは教師側であって、子ども側は必ずしもそうではない。沖縄戦について「知らない」場合すら多い。だから、子ども側からそれを学ぼうとする問い・疑問が出やすい素材（教材）を導入として設定すべきである。本書では沖縄戦の導入として対馬丸事件を描いている。

1944年8月、米軍の攻撃が迫る沖縄から疎開するため、780人の国民学校の児童を乗せた対馬丸が長崎に向かったが、米軍潜水艦の魚雷攻撃で撃沈され、子どもたちは夜の暗い海に投げ出された。だが教科書は、記述の最後に「日本の護衛艦もいましたが、そのまま北進していきました」とつけ加えている。

●護衛艦はなぜ救助しないのか

沖縄戦授業の冒頭に、この事件を提起されて、子ども側から必ず出てくる疑問は、「護衛艦がそのまま北進」したことに対してである。

「なんで子どもたちを救助しないのか」「護衛艦するためにいたのだから、北進なんておかしい」など、質問というより詰問に近い。教科書側注には、海に投げ出された4年生の子どもの証言もあるため、問う側にも切実さが感じられる。

護衛艦が救助活動をしなかったことについて、大城立裕氏は、護衛艦側には次のような判断があったのではないかとしている。

●闇の中での救助には探照灯が必要だが、これは（敵潜水艦の第二次攻撃を容易にして）危険だ。

●対馬丸は他の2隻と船団を組んでいた。救助活動しているうちに他の2隻が攻撃される恐れがある。（大城立裕『対馬丸』講談社文庫）

子どもたちを助けるか、船団の護衛という任務を遂行するか。護衛艦は前者を棄てて、後者に全力を注いだ。これを知った教室の子どもたちは、沖縄では軍隊は子ども（住民）を守らな

いのか、という疑念を抱くことになる。

米軍が沖縄を実際に攻撃してきたら、その時は軍隊は住民を守るはずだ。でも実際はどのようなだろう。このように見てくると、この疑念は沖縄戦を学ぶ有力な起点となるだろう。

●潜水艦はなぜ疎開船を攻撃したのか

もう一つ子どもの疑問は、なぜ米潜水艦は子どもが大勢乗っている疎開船を攻撃したのかという点である。「子どもが乗っていることを知っ

(13) 荒れ狂う鉄の暴風 — 沖縄戦 —

鉄の暴風の中で、住民にどんなことが降りかかってきたか。そのとき日本兵はどんなことをしたか。

■ 暗闇の海に沈む子どもたち

1944年8月、沖縄の国民学校の子どもたち780人が、軍用船の対馬丸に乗って長崎に向かいました。アメリカ軍（米軍）の沖縄への攻撃が迫ってきたため、学童疎開が始まりました。しかし、米軍潜水艦の魚雷攻撃で対馬丸は沈められ、子どもたちは暗い夜の海に投げ出されました。救助されたのは、わずかな子どもたちだけでした。日本の護衛艦もいましたが、そのまま北進していきました。

■ 戦火に追われる住民たち

米軍は、1945年3月、多くの子どもや住民が残る沖縄に総攻撃を開始しました。沖縄本島付近には、千数百隻の艦船が押し寄せ、航空母艦から飛び立つ飛行機は1300機、総兵力は50万人を超えました。これに対する日本軍は、約12万人でした。

日本軍は、住民を防衛隊に組織し、中学生などを鉄血勳隊員にして日本軍の戦闘に参加させました。女生徒は学校ごとに看護員にして、日本軍とともに行動させました（「ひめゆり学徒隊」など）。また、住民に住宅や食料を提供させ、飛行場の建設にも動員しました。

米軍は、艦船が海上から砲弾を撃ち込み、空から戦闘機や爆撃機で襲いかかりました。人も畑も森も吹き飛ばし、地形が変わるほどでした。さらに陸上では、火炎放射器で炎を吹き出す戦車などが攻撃をします。これらの中には、鉄の暴風とよばれました。

日本軍は多大な損害を出しながら、南部へ後退しました。住民も戦火の中で逃げ場を失い、次々と死傷者を出しながら、追いつめられていきました。

■ 捕虜も降伏も認めない

住民は、壕やガマ（洞窟）にひそんで戦火を避けていました。日本兵がいたガマでは、食料を出させられ、赤ん坊は外に連れ出すように命じられました。米軍は、降伏してガマから出るように呼びかけましたが、日本兵がガマの出口で銃をかまえていました。

住民は日ごろから、捕虜になるなら帝国臣民として死を選べ、米軍は鬼畜だから捕まったら残酷な目にあうと教えられていたので、ガマから出ていくことをためらっていました。ガマから出て保護される人もいましたが、米軍に攻撃されて死亡する人や自決する人もいました。

日本軍は、最後には玉砕を決意して、住民にも手榴弾を配りました。住民がこの手榴弾を爆発させ、家族や近所の人たちといっしょに自決した例が数多くあります。

座間味島では、自決したとされる135人（年齢などがわかる人たち）のうち、12歳以下の子どもの55人、女性が57人を占めていました。これらは「集団自決」とよばれています。また、住民が日本軍に殺害される事件も起こりました。その多くは、日本軍の情報を米軍にもらしたのではないかと、という疑いによるものでした。

こうして、沖縄戦での沖縄県民の死者は15万人（人口約60万人）にのぼったと推定されています。鉄血勳隊員となった県立一中生254人のうち171人が、「ひめゆり学徒隊」の女生徒222人のうち123人が、戦闘のなかで死亡しました。

— 沖縄戦 — 日本軍の作戦目的 —

日本軍は沖縄の戦場で、「敵の出血消費」をはかって米軍を少しでも長く足止めし、日本本土の防衛（本土決戦）の時間稼ぎをしようと考えていた。沖縄を「捨て石」にする作戦だった。

沖縄の日本軍司令官は「兵員は最後まで戦うべし」と命じて、6月下旬に自決した。そのため、獲られた日本兵はこのあとも絶望的な戦いを続け、犠牲者は増え続けた。沖縄の日本軍が正式に降伏したのは9月7日であった。

座間味島の戦場跡。一般市民の死者約4000人、沖縄県出身軍人・道民の死者2万8000人以上は沖縄県統計。これに海軍での死者、敵光やマラリアによる死者などをふくめて、推計される。

座間味島の戦場跡。一般市民の死者約4000人、沖縄県出身軍人・道民の死者2万8000人以上は沖縄県統計。これに海軍での死者、敵光やマラリアによる死者などをふくめて、推計される。

座間味島の戦場跡。一般市民の死者約4000人、沖縄県出身軍人・道民の死者2万8000人以上は沖縄県統計。これに海軍での死者、敵光やマラリアによる死者などをふくめて、推計される。

て攻撃したのか」「潜水艦からは、船の乗客が子どもだとわかっていたのか」など、潜水艦側への疑問が出てくる。米潜水艦は、疎開船（普通の客船）と認識して、突っ込んでいけば一般住民への攻撃と意識していたのか。

この点について大城前掲書は、潜水艦側は「疎開学童を乗せた徴用船とは知らず」としている。だが「じつは対馬丸には、軍人、軍需物資が搭載されていて」と記している。つまり対馬丸の子どもたちは、軍隊・軍需物資と同居する形で乗船していたのだった。

そうすると教室では、米軍が上陸してきたとき、子ども（住民）たちの姿が見えても、そこに日本軍がいれば、攻撃してくるのかと疑問を持つ。つまり沖縄戦が始まれば、子どもや住民も攻撃されるのかという問いが、子ども側に生じてくる。

これは「沖縄戦では子どもや住民はどうなるのか」という問題意識となり、有力な学びの起点となるだろう。

●鉄の暴風—惨状を想像する

沖縄戦での米軍の攻撃は「鉄の暴風」と称される熾烈なものだった。海上からは1000隻を超える艦船からの艦砲射撃が町や村に炸裂する。空からも爆弾が降り注ぎ、地上戦では戦車まで疾走し、火炎放射器でガマや壕に隠れる兵士・住民を襲う。陸・海・空からの無差別攻撃が展開する。

だが教室で子どもたちが注目するのは、鉄の暴風の熾烈さばかりではない。その渦中に巻き

込まれた子どもや住民の姿である。導入段階で暗い海に投げ出された子どもの証言と重なり合い、「暴風」下の人びとの惨劇をあれこれ想像してしまう。「戦争になると子ども（住民）たちはどうなるのか」と感じていただけに、米軍の攻撃を「ひどい」と感じるだけでなく、どうしても人びとの姿を思い浮かべてしまう。

この惨劇・苦難を想像するという子ども側の営みは、「ガマが近くにあるだろうか」「子どもは恐怖で動けないだろう」など、一人ひとりが異なった情景を思い浮かべる。イメージは個人的で多様であり、それだけに沖縄戦の事実を主体的に認識することになる。

●沖縄の日本軍とは

さらに教室では、対馬丸撃沈の際の護衛艦の問題に関連して、「護衛艦は（軍隊は）子ども（住民）を守らないのか」と疑問が出されていた。本書では、住民との関連での日本軍の行動を、次のように記している

- ガマでは住民は食料を出させられた。
- ガマにいた赤ん坊が外に出させられた。
- 捕虜にはなるな。米軍は鬼畜だから捕まったら残虐な目にあう。帝国臣民として死を選べと教えられた。最後には玉砕を決意して、住民に手榴弾を配った。
- 情報を米軍に漏らしたと疑われた住民が、日本軍に殺害された。

以上の事例を見れば、軍隊は子ども（住民）を守らないのかとの問いに真正面から答えるものであるため、教室はざわつく。

教科書 p.5 から
④遺骨の収集を見学する子どもたち/
「遺骨の人の名まえはわからないのですか」など
質問があいついだ。〈具志堅隆松/合同出版〉



さらに本書は「集団自決」も事例を挙げているが、これこそは住民を守るどころか、「日本軍による強制・関与」によって自決さえ強要されたとされるものだ。

●日本軍の強制・関与

だが本書では「強制・関与」という言葉では記述せず、座間味島の集団自決犠牲者135人中12歳以下の子ども55人、女性57人という実態、さらに側注には肉親が家族に手をかける情景を描いている。

米軍の攻撃のさなか、子どもが「自決」するだろうか。これは親が何としても守り抜きたい子どもの生命を、自らが手をかけて断つという想像を絶する事態なのだ。住民はそういう地点にまで追い込まれていたというほかない。

本書の記述は、そこへ追い込んだものは何かという問いかけである。「強制・関与」という言葉で実態を説明するのではなく、子ども側が自らの追求で、その地点に行きつけるように想定したものだ。

●なぜ沖縄戦をやったのか

ここまで来ると、子ども側からはさらに問いや疑問がでてくる。「日本は何のために沖縄戦をやったのか」「沖縄戦なんかやる意味があったのか」等々。

米軍が沖縄に攻めてくる。島々と住民を守るために戦うというのであれば、戦争目的は明快だ。が、そうではないことがこれほど明らかになれば、日本軍の目的はいったい何だったのか、という問いは必至である。

本書はページの最後に囲み記事を置き、「米軍を少しでも長く足止めし、日本本土の防衛の時間稼ぎをしよう」とする作戦だったと述べている。

これは教科書記述をもとに教師側の説明になる。だが、子ども側は沖縄戦の目的を問い、何かを追求しようとしているため、説明を自らの関心で、主体的に受け止め、次いで「時間稼ぎ」に対するさらなる問い・疑問を抱くのではない。

描かれている事態に対して、何か感じる、問いや疑問をもつ。それは子ども側からの学びの起点となることは間違いない。歴史教科書はそのことを実現するものでなくてはならない。 ■